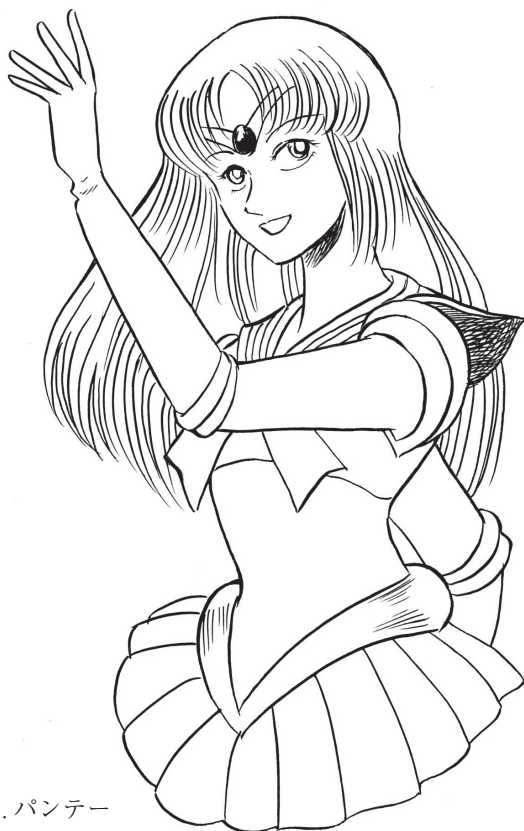


小説
刑事大打撃
～おたけっと 21
会場爆破予告事件～

事件ファイル .N09



ミルカ、ヘンナ、バンテー

フィンランドからの親善大使、五歳まで東京の浅草で育った。港町とミルカの育ったハンコ市との親善を目的に来日。大打撃、桜木に身辺警護を依頼する。

セーラー・オルクス

太陽系外縁天体オルクスを守護に持つセーラー戦士。地球滅亡を企む悪の秘密結社ワルダックの卑劣な罠にはまり、謎の光線を浴びて、デブのオヤジに変化させられる。しかし、その姿にされてもけなげに彼女は、地球を守るために戦い続けている。



たくさんのセーラー戦士

セーラー戦士のコスといえ、デブの中年男と相場は決まっている！（談：大打撃）

おたけっと 21 常連の微妙な 2 次創作系セーラー戦士男、セーラー・オルクスの仲間が初登場。

いや実際には、開場で偶然コラボ合流しただけの関係なのかも？



桜木優美子

捜査一課強行班所属、配属 2 年目の新人。大卒のキャリア組だったはずが…。容姿端麗だが、ファンションは地味。育ちが良く、お勉強は出来るが世間知らずなところがある。しかし辛抱強く、根性がある。

大打撃

主人公。港町署の捜査一課、強行班所属。強盗殺人からネコ探しまで、何でもやらされている、働き盛りのベテラン刑事。昭和風味のお下劣ネタで、パートナーの婦警にセクハラするのが人生の楽しみになっている。





金正男・キムジョンナム（のコスプレイヤー？ソックリさん？）

おたけっと21の会場内には、アニメやゲームのキャラだけでなく、実在の有名なそっくりのカッコウをしたコスプレイヤーも毎回いるようだ。

今回はナント！あの暗殺されたはずの北のアニキが登場。

まさか、ホンモノじゃないよね。

下鴨教授

かつて「神の手を持つ」と言われた古墳発掘の名手。

国立港町大学考古学研究室の元教授であり考古学者。

現在殺人犯として服役中のはずなのに、なぜこの会場に？



仙波教授

東京西大学考古学研究室教授。下鴨教授をライバル視し、当初からインチキだと決めつけていた。普段は大打撃も顔負けのセクハラ教授。



魍羅林女子（ミラリンじょし）

東京西大学考古学研究室で働いている仙波教授の助手。



虎マスク（笑）のコスプレ超深夜プロレスアニメ、虎マスク（笑）のマスクをかぶって、同人誌を売る謎の男。

その正体は、大打撃をピンチに追いやったあの男だった！

井村 慎二

鑑識課職員。港町署に初配属された2年生。独身で桜木ファンクラブの発起時からの会員。彼女の大ファンで憧れている。



ネオ・テロリストスリー

ガチで国際指名手配中のテロリスト3人組。

「オット・ヤイコラ」「エサ・ヒエタネン」「シッポ・カタイネン」

地元北欧では普通でも、日本では変な感じの名前であることを、彼らはまだ知らない。

刑事大打撃

「おたけつと21会場爆破予告事件！」

(1)

俺の名は大打撃、港町署の敏腕刑事^{デカ}だ。ビンビン刑事でも敏感肌でもない。

年の瀬も押し迫った12月28日、俺は朝一で署の会議室に呼び出されていた。警察つてところは、年中無休のサービス業だといえ、世間様が休んでいる年末年始に仕事をさせられるってのは、やはりムカつくものだ。まあ、だからといって休んだところで、バチンコか雀荘に行く位で、特に用事がある訳でもないのだが。

そもそも同じ場所に同じタイミングで大勢ヒトが集まる事自体、理解しがたいし、そんな所に行く奴の気が知れん。年末の盛り場に出かけたところで、テロにでも巻き込まれるのがオチだ。いっそ浮かれた愚民どもなんぞ、まとめて巻き込まれてしまえばいいのだ。と、年末年始の混雑ぶりを伝えるニュースを見るとホント思う。

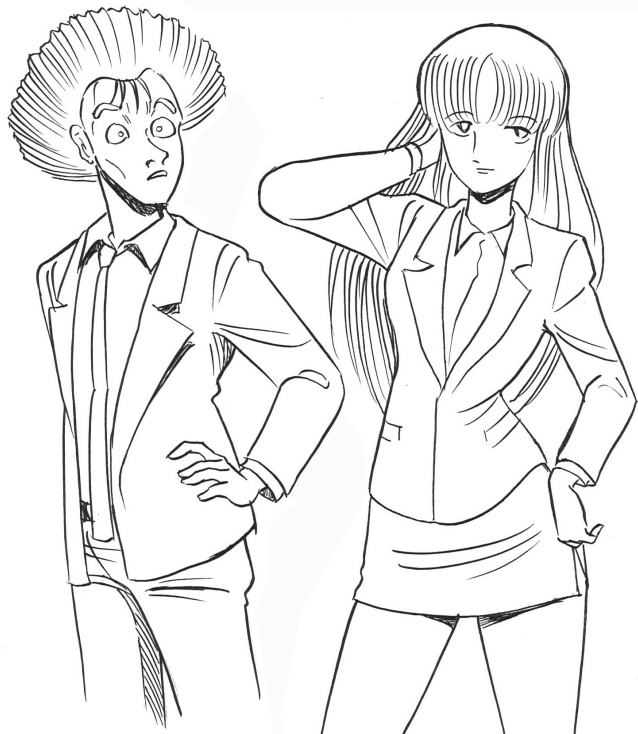
なぜ、みんなで一斉に出勤したり、一緒に休日を取らなきゃなんのだ。近頃サマータイム精度の導入が検討されとるが、そんな程度では甘い。1時間や2時間ずらしたところで何になる。出社時間も退社時間も24時間フルに使って、全国の法人企業を対象に1時間ずつ順に出社

時間をずらしていけば、都知事のホラ話である通勤ラッシュの解消も一発で解決だし、痴漢もほぼ撲滅されること間違いナシだ。大型連休も年金番号順にでも1日ずつずらして取ればいいだろう。GWも夏の長期休暇も全部少しずらずらせば、高速道路も新幹線も帰省ラッシュとおさらばだ。

季節毎の年中行事を意味も分からんクセに、情性でやるのも気に食わん。思わず5歳の幼女になって『ボーッと生きてんじゃねーよ!!』と叫びたくなるような光景が、日本中で繰り広げられているのだ。

クリスマスなんて、バカッブルが目障り^{あつた}だけで爆笑すりゃイイと本気で思つとるし、紅白を暖か家族で見るとか、ウソ臭くてむしろ寒気がする。孫なんぞお年玉目当てでただだし、息子の嫁は旦那の実家の財産相続権^{たせ}を狙つて、ジジババの健康状態をチェックしに来ているに過ぎんのが何故わからん。想定外に雑煮のモチのサイズが大きかったら、命の危険を感じるべきだ。ご相談はお近くの警察署の生活安全課まで来るがいい。殺人未遂で息子夫婦とその兄弟を一網打尽にしてくれるわ。

あと寒空の下、違法改造バイクにまたがって、初日の出を見に行くとかつてのも正気のさたじゃない。普段あれほど布団から出るのを嫌がって二度寝三度寝しとるクセに意味がワカラン。初詣なんぞ10年以上行つたらん。だいたい神なんて奴は、信じるんじゃなく、信じさせる



もんだ。それも俺様に都合イイようにな。俺も昔は新興宗教の教祖様とかつて担がれたこともあったもんだが、あの時は…。

「遅いですよ、大打撃刑事！」

「うつせえなあ…。今、ちょうど、恒例の『導入部の独り言』が佳境に入ったところなのによお」

会議室では、俺の相棒の、ぴよっこ刑事、桜木優美子巡査がプリプリ怒っていた。プリプリさせるのは、胸と尻だけにしておけと言いたい。

ちなみに「巡査」というのは本当はあだ名だ。桜木はいわゆるキャリア組で最初から警部補なのだが、新米らしく巡査と呼ぶことにした。本人もそう望んでいる。同期の子たちに無駄に上司風吹かせたくないだろう。

それにしても、なぜ俺の相棒はいつもキャリアの女なんだ。ま、大門署長のヤツが何か悪巧みしているのは間違いない。どうせお目付け役にしておけば、そのうち俺がブッチ切れて、不祥事の一つもおこすに違いない、とも思ってたんだろう。

そうは行くか！俺の我慢汁は並みじゃあないことをヤツに思い知らせてやろう。

「まったくもう、今日は遅れないでくださいって言っておいたでしょ？」

「こんな天気の良い日に、朝も早よから『遅れるな！』と念を押されれば、むしろ行きたくなるのが、学校

と会社ってモンだ。人類の9割はフトンかぶって二度寝し、その内の5割は更に三度寝するとWHO（世界保健機構）の調査結果でも明らかになっとなる。どうせ、何ぞ厄介な用件を押し付けられるに決まってるしな、フフン！」

「なんかムカつく顔してますが、まあいいです。で早速ですが、大打刑事。こちらにいらっしゃるのがミルカさん。北欧のフィンランドから来日された、親善大使です」「見るかあ？ 小さすぎて見えなあい！ でしょ？ つて、おおっ！」

なっ、なんと美しい女性だろうか？ 錦糸町駅南口の裏通りにも、ここまでの美女は立ってなかった。いや、顔だけじゃない。だいぶ昔に『ボン・キュ・ボン』という言葉が流行ったことがあったが、その擬音の通りの女とお近づきになったのは、商売女以外では初めてだ。しかも輝くような金髪だ。

「さっ桜木よ、お前が時間を間違えて俺に伝えるから、大事なお客人を待たせてしまったではないか！ バカもん」

「ええっ！ それ、私のせいだつて言うんですか？」

桜木はプリプリを通り越して、ブーブー怒り始めた。そんな二人をミルカはニコニコしながら見ている。

ミルカは、日本人と比べてかなりの長身だ。大打撃と同くらいだろうか。しかもヒールを履いているため、目

線はさらに上回る程であり、ちょうど桜木の頭の上に顔が乗っかる位だ。青い目で鼻筋の通った顔はとても小さく、8頭身どころか9頭身に近い。

そのせいか桜木と同じような地味なビジネススーツでも、ずっとスレンダーに見える。なのに胸だけは豊満でスーツからこぼれ落ちんばかりであり、大打の目はもう釘付けだ。

「初めまして、お嬢さん。私の名前は大打撃と言います。港町署ナンバーワンの敏腕刑事です。部下の不始末、代わってお詫び致します。お気軽に大打刑事とお呼びください。もちろん大ちゃんでも、撃さんでもOKですつ、…て日本語分かりますか？」

大打撃は、出来るだけ真面目な顔をして、誠実さを演出していた。しかし、目はいやらしく三角になり、無意識に揉み手をしていることに本人は気づいていない。

「うふふ。日本語ぜんぜん大丈夫です。私は2歳から5歳まで東京の浅草で育ちました。そして小学校からは、父の仕事の都合で生まれ故郷のフィンランドに戻りました。この『港町』とよく似た、美しくて雑多な港湾都市で『ハンコ』という街です。名前は『ミルカ・ヘンナ・パンター』といいます。ちょっと恥づかしいので、『ミルカ』とファーストネームで呼んでください。よろしくお願いします」

ミルカは、少し顔を赤らめて、恥づかしそうにおずお

ずと、大打たちに握手を求めて来た。

「改めまして、桜木優美子です。まだ、新米ですがよろしくお願いします」

「引っこんどれ、ぴよっ子。あ、あの、ミルカさん…」

「ハイ、『ミルカ』でイイですよ。でも私の名前、とても変ですよ。分かっています」

「いえ、そんなことはありません。ときめくお名前です。私だって『大打撃』なんて超変な名前ですから。弟なんて『大打撲』、爺さんなんて『大打明治』ですよ。もう嫌になっちゃいますよ」

大打は、スチャツと直立し、真面目な顔をして敬礼した。

その横で今度は桜木が目を丸くしている。大打撃に弟が居たらしいという噂は、かろうじて聞いたことがあったが、祖父の名は初めて聞いたのだ。しかも名前が『大ダメージ！』である。それじゃ父の名は？ 母は？ やっぱり変な名前なのか？

…いや、待てよ。大打刑事に家族や親戚の話題なんて、どうにも似合わない。それに一族郎党そろいもそろって変な名前だなんて、いくら何でも不自然すぎる。もしかしてこれは、大打撃一流の単なるギャグ、ジョークの類なのではないか？

10秒くらいは真剣に考えた桜木だったが、すぐにやめた。冷静に考えてみれば、別段どうでも良いことだった

からだ。裏山のタケノコの脇に捨てられてた孤児だとか言われた方がまだ自然だ、と桜木は思わずニヤけて考えていた。

「ありがとう、大打刑事。フィンランドでは普通でも、日本では変な意味になる名前、たくさんあります。ちよつと前の私の国の元首は『アホ総理』でしたし。私の先輩には『アホカス大使』という男性がいます」

大打撃は、うんうんと、大袈裟にうなずいている。

「浅草育ちか。あの辺はガラが悪いオヤジばっかだしな。心無いイジメや、名前をからかってくるような失礼な輩やからも大勢いたんでしようなあ」

「へー、じゃあ浅草に住んでる人って、大打刑事みたいな人ばかりなんですね。居心地よさそうじゃないですか。大打さんにとっては」

「いえそれが、ほとんどそうだったことはありませんでした。みんな親切で、『ミルカ、この漫画見るか？』とか、『うちでアニメでも見るか？』なんて飽きもせずオヤジギャグを繰り返しながら誘われたり、『この飴、甘いぞおレゼントを毎日たくさん頂きました。日本の方たちは子供からお年寄りの方まで、みんなとても親切で、平和で幸せな子供時代を過ごしました」

大打撃は思う。なぜ、日本人はこうも、金髪美人に弱いのだろうか。やっと言葉を覚えただけのクソガキ

から、昨日の晩ごはんのおかずも思い出せないボケた爺さんまで、揃いも揃ってスケベな下心で、脳内地図は一杯なのだ。そのせいもあって、冗談もオヤジギャグ一色だ。そして桜木は思う。興味の無い話だなあ、と。

「ゴホン！では、早速ですが：」

桜木が分厚いファイルを開き、ミルカについての資料を見ながら説明を始めた。

「今回、ミルカ大使は、日本の文化や風俗を視察し、同時にハンコ市と港町市の、姉妹都市としての共通のキャラクターを、策定するヒントを得るために来日されたとのことですよ。私と大刑事事は、彼女を目的の地までエスコートし、同時に港町に滞在している間、警護するようにと、命じられています。なお、言うまでもありませんが、くれぐれも滞在中、事故や事件、そして大刑事事が間違いを犯さないようにと、署長及び、その上の方々と、市長とそして、その上と、そのまた上と、さらにずっと上の方からも、キツいお達し、ご注意をいただいております」

「うむ、桜木君、親善大使の警護となると、何かあったら即、国際問題になる。それは当然のことだ」

大刑事事は、桜木の口調に合わせ、無理してもっともらしい話し方をしながら、後ろ手を組んで、会議室内を動物園の熊のように、ウロウロと往復運動している。署長ならともかく、普段の大刑事には、あり得ない行動であり、なんとも不自然な感じだ。が、おそらくは単にカッ

あのサイコな殺人鬼が脱獄したというのに、いったい何をのんきに想像しているのやらだ、と桜木は少しため息を混じらせている。

「ふう、そういうわけで、私だけならともかく、大刑事事と一緒に警護にあたるなんて、もしも何かあったらと心配で、心配で、今から緊張しています」

「まあ、この情勢下だ。ベテランの俺を指名するのは分かるが、お前のような経験も、アソコの穴も浅くて、膜だけ無駄にお厚いヒヨッコに、こんな重要な任務を与えるとは、署長も市長も、頭がどうかしてると思えんな」

「…ちよつと、さっきから大刑事事、ミルカ大使は日本語ペラペラなんですよ。聞こえてますから、いつもみたいに、恥ずかしいセクハラ発言をしないでください：」

桜木は、大刑事の袖を引っ張って、ミルカの方をチラチラ見ながら、小声かつ早口で耳元に囁きかける。

「あつ、しまった。そういうええそうだった。それさあ、もう早く言ってよ」

と大刑事は、どこかのテレビCM風の言い方で、おどけて誤魔化して見せた。

「それは名刺をクラウド管理する会社のCMですね。よく知ってます。日本のCMはとも面白いものが多いですよ。欧州でもユーチューブ経由で、知れ渡っている作品がたくさんあります。カップヌードルとかも国際

コ付けているだけのだろう。

「実はそこなんです。少し懸念を感じざるを得ない事案が発生しています」

大刑事はビタリと往復運動を止め、桜木の顔を見下ろした。

「聞いているさ。深夜、連絡を受けたからな。まあ、そのせいで睡眠サイクルが乱され、今日はサイコカンの朝立ちが激しかったが：。アイツが、あのバカが消えたんだろう？」

「はい、そうなんです。関内将司が弁護士との面会後に、接見室の透明な仕切り板、小さな穴がいくつも空いたプラ板の部分を蹴り破って逃げたそうです」

「フン、あんな薄いプラスチック、俺ならサイコカンで社会の窓越しに突き立てただけでぶち破ることが可能だと、何度もバカ署長に言ったのに、補強工事の予算が無いだの何だのと。あの無駄に豪華な昼飯を10日も抜けばすぐ可能だし、成人病も一発完治で一石二鳥だ。：にしてもだ、弁護士が帰ってヤツが逃亡を実行してから、それに気付いて署内に連絡が回るまで時間がかかり過ぎだぞ。危機感が無い証拠だ」

「Ohージャパニーズ大脱走、スゴイスゴイ。ルパンのアニメみたいですね」

ミルカの顔が大使の顔つきから、無邪気なクールジャパン好きなオタク少女のようにキラキラしている。

的な賞を取ってますよね」

「ほーう、すごいな、ホントに分かるんだ。これじゃあ、めったな下ネタも言えないじゃないか」

つまりミルカは、さっきの大刑事のセクハラネタを理解した上で、敢えてスルーしていたのだ。大刑事は、これはヤバイと思い、背筋が曲がり、顔に黒い縦線が入ってしまった。だが、むしろ脱獄犯の件で顔に縦線が入るべきだろう。

「フフフ、そんなに気を使わなくて良いんですよ大刑事事。まる子ちゃんのおじいちゃんみたいな顔になってますよ」

「ああっ！息が詰まるう、苦しい。俺は息を吐くように、下ネタを言い、挨拶がてらに署の婦警どもにセクハラしてないと、高血圧と、酸欠と、尿毒症で死んでしまふんだア。胸のカラータイマーが鳴り始めたら、地球上での生存可能時間は、残り1分だ」

碧眼の美人外国人に、小ネタ下ネタビームを軽くはじき返され、嫌がられるどころか気を使われる屈辱的良心攻撃に、大刑事は喉を掻きむしる仕草をした。

「ふん！本来そのくらいで丁度いいんです。今日だけは普通に羞恥心のある、大人みたいに見えますよ、きつと」

と桜木が手のヒラをピッピとさせながら、あつさり、さつぱり、すつきり言い放った。無論大刑事は桜木の攻撃なんぞ意に介さない。

「それにつけても、おやつはカールだ。この重要な任務に俺が選ばれるのは当然だが、署長は何故お前なんかを選んだのか。いったい何考えてんだか理解に苦しむ」

「そうですね。私はともかく、こんな大役に、どうして大打刑事を指名したのか、私には不思議でならないです」

桜木も負けじと言い返す。この会話、すでに2巡目だぞ。

二人の掛け合いを聞いていたミルカが横槍を入れた。

「いいコンビですね」

「どっか！」

練習も無しにピツタリと一致するあたりは、20年やつても一向にタイミングが合わない『新婚さんいらっしやい』の司会の二人にも見習って欲しいものだ。

「大打刑事の事は、私が署長さんをお願いしました」

「はあっ？ なんでえー！？」

ミルカの発言に桜木は、全く納得できないとばかりに、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。ミルカはそんな桜木にニコッと笑いかけ、そして中途半端なタツノコ風味で語りだした。

「説明しよう！ 昨日、北欧から来日したばかりの親善大使ミルカは、さっそく秋葉原を視察、ラジ館に展示されているフィギアをなどを楽しそうに見て回っていた。とその時、彼女のすぐそばで日本人離れた金髪を異常

な形状に逆立てた男が、ガチャガチャを回しながら突然、怒って暴れ出したのだ…。ハイ、ここから回想シーンでえす！」

『ウツガー！ 何だこのガチャア！いくら買ってもカブリばつかじゃねえか、コンプまで何千円使わせるんだ一体、いい加減にしろゴルアー、詐欺だ！ この店は詐欺だあ！』

『あつ、ちよつとお客さん、もつと丁寧に回さないと壊れちゃいますよ。ああ、蹴らないでちよつと！ もう、それ以上やると警察を呼びますよ！』

『上等だゴルアー、俺がその警察様よお。ああ、そうだ、このカブったフィギア、全部買い取れよ、お前の店で責任持つてよお！』

念のために、解説しておくが、この回想シーンはミルカの一人芝居である。

『そりゃ構いませんけど、これだと買取価格は一個50円以下ですよ。こっちはビニール開けちゃったので30円以下です。それで宜しければ身分証明書見せてください』

『ケッ、500円で買ったフィギアが、1分後には30円か。足元見やがって、この野郎。ホラよ身分証だ。見たら早く返せ！』

『あーっ！ このトサカ男、冗談かと思つたら本当に警察官だ！』

『あつたりまえだ。どこからどう見ても、どこにでも居る、親切で優しいごく普通の一般的な警察官だろうがあ。お前の目はフシ穴か！ Fusianasan か！ まあいい、一セツトはコンプできたから職質は許してやろう』

ミルカは、フウツと、息を切らしながら熱い演技を終えると、優雅な親善大使然とした語り口に戻った。

「私はその時思いました…。ぜひこの人に警護をお願いしよう、と」

「ハイイ……」

桜木は、あまりの驚きに抱えていたファイルをバサリと落としてしまった。

「あのお、一ミリも理由らしき要素が見当たらないんですが？？」

怪訝な顔で問う桜木に対して大打撃は、フフンとばかりに鼻を天に向けつつ、シャフト的流し目で見下ろす。

「なゝるほどお、完ッ壁に納得した。要するにだ、アキバ魔界を南洋のクロマグロの如く自在に回遊し、呼吸をするようにフィギアを売り買いしている俺様の行動を見て、クールなジャンカルチャに詳しい、凛々しくて、逞しくて、優しそうなカッコイイ警察官、みーつつけたつ、そう思ってたって訳だろう？ ふっふっふ、お目が高いと言わせてもらおう」

桜木は無言で聴いているが、その眼差しは氷のように冷たい。

「ハイそうです。幼い女の子が警官の制服を着ているクールなフィギアを、一体一体丁寧に見つめるその眼差しは、匠の職人さんのような情熱と気迫と信念に満ち溢れていました」

「いやあお恥ずかしい。アレはね、仕入れだから、仕事だから真剣勝負なんだよ。キズ一つ、塗り方一つで、値段は激変だからね」

血走ったイヤラシイ目で、ロリエロフィギアをハアハアしながら凝視している大打の姿しか、桜木には思い浮かばない。

「それと…、大打刑事。あの時、街を歩きながら興味深い歌を口ずさんでいました」

「え、歌？ 俺がアキバで唄ってたって、どの曲だろう？ ヲしよーこー、ヲしよーこー、ヲしよこしよこしよこー、

♪なああかがあわあしよこーってヤツだったけ？」

「いえ、しょこたんのテーマじゃありませんでした。歌詞が違います。こんなです。

♪ヤー、ヤー、ヤーヤーヤー、

♪オー、チンチン、オー、チンチン

♪夏の休み川あそびいゝ、
って感じの歌です」

「えーっ！ あれかあ、あれ聞かれちゃったのかあ」

取り乱すように、言い訳をしている大打を制するよう

に、言葉をかぶせるミルカ。

「小さな頃に聴いたような、歌ったような、不思議と懐かしい感じがする歌です。もしかしてこの人は、私の為に唄ってくれているのかもしれない、とさえ思いました」
「……」

桜木は、ますます疑念に満ちた顔をしつつ、それは一体どんな曲なのか、と小声で大打撃に訊いたが、まるで空気のように無視されてしまった。

「スミマセンなあ、あんなセクハラじみた曲……」

「いいえ、これは奇跡です。そして素晴らしい出会いなのです。あなたはジャパンカルチャに詳しい警察官。私のエスコートにドンピシャです！」

「えっ？ エスコートって、そんなあ、いやあ、困っちゃうなあボク……」

大打撃は、クネクネと、気持ち悪い動きをしている。

「大打刑事、エスコートの意味には『護衛』っていうのがありますから」

桜木は、氷の微笑を浮かべながら言い放つ。引き続きジト目だ。

「今度ぜひ、また私にあの歌を聴かせてくださいね」

「えっ、あの歌を？ いやあ、君と二人きりならまだしも、ちよっとここじゃマズいんじゃないかなあ……」

「はあっ？ 何ですかそれ？ 彼女には唄ってあげられても、私に対しては唄えないって言うことですか？ 日頃

こんなに雑務を押し付けられて、迷惑ばかりかけられているのに、私には歌一曲聴かせられないって、それって一体どういう意味ですか？ 何とか言ってくださいよ！
大打刑事!!」

桜木は、もはやぷりぷりどころかブリブリと怒っている。

「ふふふ、桜木刑事ってカワイイですね。日本の女の子って感じです。とまあ、そんなわけで、市長さんに大打さんを捜してほしいとお願いをしたのです。でも髪型とか特徴を説明したら、『ちよっと調べたらすぐに分かった』って、言っていましたよ。さすが有名人なんですね、大打刑事って」

大打撃は、ちよっと威張ったような感じで、上向き加減の姿勢のままミルカの横に立つと、ポンポンと気安く肩をたたいた。

「まあ、ボクはこの港町署のエースですから、有名なのは当然です。なるほど、納得ですな。ただ、私は『おたく』ではないので、それほどフィギアには詳しくありませんが、最新の日本文化のご案内……。まあ、大船に乗ったつもりで、お任せください。俺が何処へでもお連れいたしますよ」

無理して丁寧っぽくしゃべっているせいか、一人称がまったく安定しない。

桜木は、調子に乗る大打撃を無視して話をかぶせる。

「それで、具体的にはどちらに向かわれますか、ミルカさん。例えば、港町能楽堂では今、最新の日本舞踊や伝統的な雅楽、狂言などの催し物が丁度行われていますよ」
「チッチッチ。まだ、分かってないようだな、桜木は」
大打が人差し指を立てて、桜木の顔の前で揺らした。
「フッ！ 明日からの3日間、パシフィコ港町で行われる『おたけつと21』、これだろう、彼女の目的の地は！」
「さっすが、大打さん！」

ミルカがピョンと飛び上がって、おどけてみせる。まるでティーンの子のような可愛らしい仕草だ。知性的で大人っぽい雰囲気の外見とのギャップが萌える。

「桜木さん、先ほど言った通り私は幼少期、浅草で育ちました。幼稚園の帰りにはもんじゃ屋さんとか駄菓子屋さんに、毎日々々寄りました。三社祭りにも参加しています。寄席や演芸場には、おじいちゃんが良く連れてつてくれましたから、日本の古典は既にバッチリなんです」

「大打刑事、もんじゃ屋ってなんですか？ どことなくモジャモジャした、気持ちの悪い響きのネーミングですが、もしやゲテモノ系の食べ物屋かなんですか？ 聞いたことあるような無いような……」

小声で大打撃に訊ねる桜木。大打はそれをケツという顔で見下ろす。

「な〜んだ桜木は、もんじゃ焼きも知らんのか。田舎か

ら出て来て何年になるんだお前は。ああん？ 言っとくが、お好み焼きを、ただ水で薄たモンなんて思うなよ。確かに見た目はゲロそのものだが、実はあれはかなり美味いんだぞ。俺も昔は、吉原のネエちゃんたちと、金が足りない時よく行ったもんよ……。ビールやチューハイにも合うし、寿司屋行くよりずっと安くて、場も盛り上がるしな」

「見た目は、ゲロって……普通そんなものを女性と食べに行く？」

信じられないとばかりに、桜木の顔はフレイメン反応を起こしている。

「行くんだよお、東京の下町じゃあデートに見合いに結婚式の2次会まで、もんじゃ屋を使うんだよお。まあ、仕方が無いからそのうち、気が向いたら連れてってやる。外国人よりも貧しい人生経験ではあまりに不慣れすぎるかな」

「いえ、貧しいままで何の問題ありません。遠慮しておきます」

「Oh！ 美味しいのに……。スウェーデンでもきつと流行りますね」

「で、ミルカ、『おたけつと21』なんだが、何かお目当てでもあるのかい？」

「ハイ、実は私、次に日本に行ったら、やろうと決めていた事があります。それは、コスプレです。コスプレデ